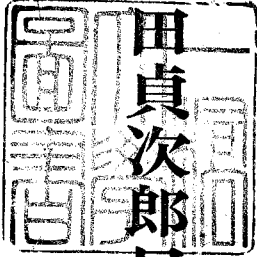


上田貞次郎日記



明治三十八年
— 大正七年



目白の自宅における筆者と家族
(大正7年)



第一回留学より帰朝当時の筆者（明治四十二年）

Qb
A-291



上田貞次郎日記 目次

明治三十八年（一九〇五年）	三
商事経営学に関する意見	四五
明治三十九年（一九〇六年）	五五
断片・小論（1）—（89）	一〇四
明治四十年（一九〇七年）	一四九
断片・小論（1）—（47）	二七八
明治四十一年（一九〇八年）	三〇九
明治四十二年（一九〇九年）	四〇一
明治四十三年（一九一〇年）	四〇九
明治四十四年（一九一一年）	四一一
明治四十五年（一九一二年）	四一五

大正二年（一九一三年）	四二九
大正三年（一九一四年）	四四一
大正四年（一九一五年）	四九九
Dialogue（対話）	五一〇
大正五年（一九一六年）	五三七
大正六年（一九一七年）	五四三
大正七年（一九一八年）	五五七

写 真

目白の自宅における筆者と家族・第一回留学より帰朝当時の筆者

（巻頭）

徳川頼貞、鎌田栄吉、小泉信三氏等との記念写真・書齋における

筆者・第二回留学当時ロンドンにおける筆者（本文の中）

跋 文	五七一
-----	-----

跋

「上田貞次郎日記」は前回発行の大正八年―昭和十五年について、年代的には遡つて明治三十八年―大正七年の十四カ年を刊行することとなつた。本編は和文は八百枚（四百字）で前回同様だが、英独文がタイプにして三五〇枚あるので、前回分より部厚なものとなつた。本編の内容を摘記すれば次の通りである。

一、明治三十八年―十月は番号順に書かれているが、大体において内容は日記なので、原文の並列にしたがつた。十月以後の渡欧日記は大半が英文だがこれもまた原文の順序の通りとした。また、ここに「商榷」を経営学に関する意見」を収録した。

二、明治三十九年の英国滞在日記は大部分英文の日記と大部分和文で書かれた八十九項目の断片小論にわかれており、後者は所謂日記とは異り、それ自身一編の論集としてもおかしくない内容なので読者の便宜のために日記と断片を分けて後者を日記のあとに番号順に編輯した。

三、明治四十年は前半が英国滞在中で、三十九年同様、日記と断片小論にわかれているので、断片四十七項目は日記のあとに配列した。四十年後半は独逸滞在中で日記の様式は前半とはかわつて殆んど毎日独文又は和文で書いており、小論的な要素も日記の中に入っている。独文はドイツ語の勉強のためのものだが、原文のまま収録した。

四、明治四十一年は八月初迄独逸に滞在し、その後パリ、ロンドンを経てアメリカに渡つた。日記は七月中旬までは和独両文で、七月下旬―十月は英文が多く、残りの部分は和文である。アメリカでは二カ月間殆んど旅行に費され、四十二年一月に帰国している。

五、明治四十二年帰国後四十四年までは日記をつけておらず、四十四年になつてから大体の回顧を記している。ただしこの期間は学者、教師として講義、講演、論文の執筆も多く、学内外の事件にも奔走し、また私的に結婚生活に入つたなど公私とも多事だつたことは推察できるが、その詳細は記録されていない。明治四十二年に「欧米漫遊所感」を収録した。

六、大正元年から再び日記をつけた。

七、大正二年九月から三年十二月までは第二回の留学で、徳川頼貞氏の後見役として英国に渡り、第一次欧大戦の勃発によつて急ぎ帰国した。この間の日記も大部分英文で書かれている。また、当時の記録を残すために英字新聞の切抜が相当あるが、これらを収録することはスペースが許さないので、見出しだけ掲載した。

八、大正四年には Dialogue (対話) を収録した。この文章は滞英中に計画され、帰国後書かれたことが日記中の記事によつてわかるが、ノートが二冊あり、第一冊には第二章まで書かれており、第二冊の改訂分は第一章の書直しだけで終つてゐる。したがつて、本輯には改訂された第一章に続けて第一冊の第二章をつぎ足した。

九、大正四年以降七年までの四年間は全部和文であり、記述についての濃淡は別として後年の日記形式となつてゐる。

明治三十八年、わが国は日露戦争に勝つて歐洲中心の世界に対して東洋新興国の實力を示威して昇天の勢にあつた。少くも当時の青年は意気盛んであり、このような環境の中に父は文部省留学生として英国に渡つた。そして三カ年の留学中若さと特典にまかせてよく学び、よく遊んだ。とくに前半の英国滞在一年半の間に、政治経済はもとより、哲学、宗教、社会、風俗等殆んど人生百般にわたる根本問題にぶつかつた。それは日本および日本人の問題を広く世界的な視野において解明しようとする前向きな努力であつたと同時に、学生時代から孤獨な人間として一貫して追求してきた市民的な自由思想の探求でもあつた。この青年として

の世界観、人生観は一応明治三十九年、四十年前半の断片小論によつてかたまり、後年の学者、教師、社会人としての活動の基礎をつくつたと思われる。

その後、大正二三年の第二次留学の際、この思想のあらましを Dialogue として取まとめようとしたが、結局本輯所載のごとき未完のものに終り、江湖に問う機会なきまま現在に及んだのである。

後年、父は門下学生諸子から哲学、宗教観についての質問に答えて、自分は学問上の哲学を特に研究しなかつたが、若い時に学んだ英国流の経験論が基礎となつてゐると云い、また自分は特に信仰を持たず無宗教だが、無力な人間にとつては宗教も持つた方がいいと云つてゐた。この何気ない言葉はこれらのエッセイを読むにおよんでようやく理解できた。しかし、それは僕がまだ若かつた二十数年前のことであり、このエッセイの書かれたのは既に遠くなつた明治三十九年だから、凡そ現代とは異つた感覚である。ただ、この文章を読んで青年に共通の真理の追求について現代の青年はどう考へるだろうか。

本輯の三分の二以上の頁数を占める歐洲留学中の日記はご覧のように英、独文の部分が多いため編輯にあつたつてそれぞれの意見にもとづいて幾つかの案を考へた。第一は英独文を全部削る案であるが、そうすることとは日記としての本体を全く害つてしまうので何等かの形で組入れることとした。第二は翻訳して掲載することであるが、時間的にも経済的にも困難なので、第三として原語のまま全部組入れる案に到着した。読者には若干不便ではあるが、これが日記刊行上最も適當であるとの結論に至つたからである。

本巻の編輯にあつても編輯委員(猪谷善一、山中篤太郎、中川孫一、小田橋貞寿)をはじめ多くの人々の好意ある協力を得た。特に佐倉潤吾氏には英、独文の校閲について貴重な時間をさいていただいた。これ

らの好意に対して厚く謝意を表する。また、前回分に対しては新聞紙その他に幾つかの紹介が行われるとともに、先輩、知友の方々から幾多の激励ならびに批評の言葉をいただいた。これらに対してもこの機会を通じてお礼申しあげる次第である。

昭和三十八年十月

上 田 正 一

上田貞次郎日記 定価二二〇〇円
(壮年篇) 送料 一二〇円

昭和三十九年四月二十日 印刷
昭和三十九年四月三十日 発行

◎ 著 者 上 田 貞 次 郎
東京都世田谷区玉川等々力
三〇三二

発行者 上田貞次郎日記刊行会
印刷者 安 倍 七 郎

印刷所 東京都港区芝三田豊岡町八
図書印刷株式会社

発売所 慶応通信株式会社
東京都港区芝三田綱町一
振替 東京一五五四九七